

ニ著トヒトレクカノ男三尺八寸スルリト拔  
キ岸ノ上ニ飛上リ御坊ノ真甲ニツニナサン  
急キアカリ給ヘト罵リケレハト傳聞テ暫ク  
待タマヘ無手勝流ハ心ヲ靜ニセ子ハナラヌ  
更ナリトテ裳ヲ高クハサミアケ腰ノ兩刀ハ  
船頭ニトラスル也其水棹ヲ我ニ得サセヨト  
テ船ハリニツ、立水棹ニテ向ノ岸ヘヒラリ  
ト飛カトミレハサハナクテ船ヲ沖ヘツキ出  
ス男是ヲ見テ如何御坊ハアカリ給ハヌヤト  
イヘハ何レニアカリ申ヘキ口惜クハ水游テ

來リ給ヘ一則授テ引導セン無手勝流ハ是ナ  
リト高声ニ笑ヒケレハ男餘リノ無念サニ惡  
シキタナシカヘセモトセト云ケレト是ヲ更  
ニ聞入ス湖水一町ハカリ隔リテ扇ヲヒラキ  
招キツ、此兵法ノ秘極ヲハ定テ殊勝ニ思フ  
ヘシ執心ナラハ重テ傳ヘンサラハくと云捨  
テ山田村ニソ著ニケル

中川元平太重興

中川元平太源重興者其先信州豪傑村上中務大  
輔源稯清入道覺玄曾孫元衛門尉信清子元衛門

尉清政二男母中川左平太源重良女也重良子七  
之助重龍因無嗣子使重興繼其家重良者將監重  
清子也重清嘗奉仕

東照宮領采邑千二百石為精射重良繼立而奉仕  
不猷大君傳箕裘藝得芳譽事既載弓術傳重興性  
溫和而才秀發也能盡其職又讀書典有螢雪之勤  
且工倭歌專用心於刀槍技術遊榊原忠右衛門忠  
鄉之門忠鄉者傳父七右衛門政勝之藝自塚原卜  
傳七代也重興習學積年以此接道統之傳猶尋諸  
家刀術採其秀而潤飾之故其術也完備也其教之

也謬也未有若是精而且盡其術者也當此時以刀  
槍技術雖鳴世者多或為渡世或為功名故不俟丁  
寧深切又不擇其人穰往而教之故其術其人殆陋  
也如重興不然雖為列侯不來謁則不授之日日聚  
同志為刺擊樂而無倦也可謂希世之士也

有馬大和守乾信

有馬大和守乾信者從松本備前守政信達刀槍之  
毅術松本政信者出於飯篠長威門為精妙嘗有武  
名槍鬪二十有三度而得首七十三級奇哉可謂人  
傑乾信能繼其傳刺擊有妙後世指此傳謂有馬流

柏原篠兵衛盛重者傑出于乾信門從盛重習其術得其傳者多天正年中事也

有馬豐前守

有馬豐前守者有馬流刀槍達人也奉仕

東照宮而言上其技藝而後被附於紀州賴宣卿其子彥八郎者繼其藝居紀州

齋藤判官傳鬼房

齋藤判官傳鬼房者相州人也仕北條氏康號齋藤金平後改號傳鬼房其父齋藤某者仕氏康爲小番衆金平自幼弱好刀槍之術而參籠于鶴岡八幡宮

修驗行者參籠而與之同談刀槍之技術既終夜爲刺擊試之味之傳鬼自然悟其妙旨默然將明修驗乃歸去時傳鬼問行者曰君之術稱何流修驗不言指躍靈去終不知其行處由嘗有靈夢瑞澄稱天流又曰天道流修行於諸州到平安城以其藝術參內而叙判官故號判官傳鬼以羽毛爲衣服其體殆如天狗後赴常陸鹿嶋到真壁而逢下妻城主多加谷修理大夫重經重經習刀槍之術列侯諸士遊其技術者多可謂盛也當此收有霞者此神道流達人其黨甚多欲與傳鬼決勝負傳鬼諾爲刺擊傳鬼忽擊

殺霞其黨怒而欲殺傳鬼報讐傳鬼不知其謀佗日傳鬼携鎌槍與弟子一人過路霞之黨數十人不意來而既圍傳鬼傳鬼察不可遁告弟子曰汝不幸逢此厄當遁避弟子不去傳鬼強逐令其去之道傍在不動祠傳鬼入其祠霞之黨急圍之凶徒發矢傳鬼則以鎌槍切其矢而落庭上數十本黨遂進而攻殺大奮勇氣而死嗚呼其勇敢也不可及舌後其怒氣不散有奇怪事俗祭之稱判官社今猶存真壁郡齋藤實子法玄繼傳鬼之術而身體輕捷甚有意氣又小松一卜齋從傳鬼而達刀槍技月岡一露齋繼其

傳齋藤牛之助人見熊之助從實子法玄各得刀槍技術牛之助居武州江戶欲輝其術於天下後赴佗州不知其終所日夏喜左衛門重能者繼其傳悟精妙重能者江州京極庶流也父曰高賢為江北荒神山城主重能自幼遊刀槍術亦善書後佐豐臣秀賴公慶元兩年有戰功後又歸江州寬文三癸卯年九月十八日死享年七十有二其子弥助能忠承其傳並能忠不啻續父之傳兼續加古利兵衛正真之傳並得其宗貞享三丙寅年六月廿九日於丹州黑岡死享年六十有二葬吹村運龍山

運龍山在笹山城西碑銘曰江源承緒

格凛然白猿慙劍紫氣徹天一片英魂長虹並懸亦齋藤右兵衛者繼人見  
 能之助傳猶加工夫潤飾之遊其門者若于加古利  
 兵衛正真特傑出與刀術達人決勝負數度衣袖未  
 未嘗觸入之鋒其精妙可知焉寬文六年正月二十  
 三日死其末流處處有之細野六左衛門吉次者從正真為精妙延室三卯  
 年十月四日死

北條記曰北條氏康ノ小番衆ノ子齋藤金平ハ  
 諸流ヲキハメテ後鎌倉八幡宮ニテ靈夢ヲ蒙  
 リ天流ト号シ奥州常陸へ修行シテ真壁鹿島  
 多加谷大夫ヲ弟子ニトリ今ハ齋藤判官傳鬼

坊上云

### 武藝小傳卷之五

#### 中條兵庫助

中條兵庫助者相州鎌倉人而地福寺檀越也此取  
 地福寺有僧慈音者欲授中條以刀槍術中條甚喜  
 之效之有年終得其奧旨後傳之甲斐豊前守大橋  
 勘解由左衛門繼甲斐之脉大發其名

或曰慈音と云傳九乃鶴戸の忌屋少にて爰中  
 二乃羽乃妙とゆり少富田傳書よへ祢傳慈  
 音とゆり宗嗣曰日向國有鶴戸殿名屋有神号鶴戸権現十八幡本記引之  
 富田九郎右衛門

富田九郎右衛門者越前朝倉家人也學刀術於大橋勘解由左衛門而得其宗其子治部左衛門繼箕箕衣藝得輕捷之術有二子兄曰五郎左衛門弟曰治部左衛門兄五郎左衛門病眼剃髮而號勢源故治部左衛門繼父之家且達箕裘藝仕前田利家鄉此時關白秀次公甚被好刀槍之藝故召治部左衛門學其技術甚有褒賞佳名至今稱之推曰富田流

富田越後守

富田越後守者始號山崎六左衛門從富田治部左衛門得中條流傳脈山崎之祖者江州佐々木家族

也移居越前任數代朝倉家天正十二年佐々木內藏助成正攻越中國未森城之時六左衛門合槍勵軍功後改富田越後守仕前田利家領采邑一万三千五百石始富田治部左衛門以一女嫁之六左衛門讓富田稱號繼中條流道統後由台德大君台命言上刺擊之夏顯名於四海

富田五郎左衛門入道勢源

富田五郎左衛門入道勢源者治部左衛門子也生於越前國宇坂莊一乘淨教寺村繼箕裘藝雖是刀槍之術由眼病讓父之遺跡於弟治部左衛門剃髮

而號勢源永祿三庚申年五月往於濃州于時常州鹿島人梅津者刀術達人而在濃州因國主齋藤山城守義龍之命七月二十三日與梅津比術優勝施美名於天下事跡在富田傳書

富田傳書勢源仕合卷畧曰勢源永祿三年庚申中夜夢法流及遊于時の夢中亦夜山崎宮家勢と云國中と云法と云る富田傳書より常死原勝比佐人梅津と云者也此若くは國宗と云る也富田傳書より勢源流及及來り申と云て才子其小形りし勢源と云合

中條流乃小太刀のみりし勢源の流名よりして不  
るに及んしと云才子勢源の方よりして中條を  
告る勢源曰是流の法未熟なり也いふ事ありと  
云し難し流と云るは中條流と云るなりし亦  
中條流の仕合なりしなりと云梅津流名と云然  
るに流の事集りし流なりし三十六人乃お牙子を就  
ち刀を及不及流皆才子に如先年南國より來りし  
川吹原又書紀に梅貴信の流を以て作道と云しと  
も思ふた刀よ及ね也勢源と云るは中條流と云る  
なりと云は梅津流の事と云るなりし

仕合よかひの用控とてうらとて云亦淑美  
 何乃うふ梅津の廣とて實あひ然勢源出合り  
 一とて民友漢略守者原修皇志と使と勢源の  
 報宿約念如物防の室へ仕合下りて申事送日  
約念如物防とて八族あ約念友叔父防白色を頃妻後成然 勢源と  
さうんたうたよ約念後分如物防と漢略と使あさうさ  
 使へりさうの申條源よ仕合下りてさうと意如物防  
 と使ふとてお引の動さすおれい使使ゆて勢源  
 へり上る勢源曰勢源の存存もたてとて梅津の  
 云化志とのあさありおれい偏おとて申事とて  
 とりてつるおあ人もて勢源のりて切りて勢源の

と漢説と勢源あてけ上六辨とるはよあつとて  
 の務員がこれ怨と受る申事とてい言ていさぬ  
 事やとて九國主の命とてい辨くと云あ使とて  
 論て勢源へかり上るは勢源大よ喜ひ民友漢略  
 事完あてていさせよとて七月廿三日存刻とてお  
 定勢源換役とらむい勢源民友漢略と換使よ  
 長中村梅津の個也乃一お大東りおと居りし  
 骨分湯かりして信んてい勢源とてあて  
 んおおれい新とていさ利とてい勢源のり  
 より僕人にぬ人長つて漢略も完よ新實實と志



本丸鞘物の中ゆていふも短く一尺二三寸の  
 より本と名出りしと皮あきまへ梅津の六条同為  
 めて才み数千人本刀の長三尺四寸なるを八角の  
 めつと梅津の袋よへあつてとて煮る骨柄人  
 又揚れて見ゆまの必定梅津に揚るの五州は  
 梅津檢使へ給うく白刃ゆては度と云檢使  
 勢源又告る勢源曰彼仁白刃少くも心ざと  
 勢源は此本刀ゆてよと告るにあり梅津は本刀に  
 さくむ梅津はさくさく乃小袖本綿をゆめて本  
 刀と名取よとさくさく氣を勢源のまをさくさく虎の尻

一向より一へ眼の電光よゆり勢源へ御色の  
 小袖をさくさくさくさく之舉て杖縁より歩ゆと  
 彼勢源本刀と執優然とて立風情牡丹を  
 下の膳端とて云るさくさく勢源梅津よと云衆  
 さくさく進て勢源と名取梅津いさくさくさく小  
 突より二腕さくさくさくさくさくさくさく  
 くさくさくさく梅津本刀をさくさくさく勢源さ  
 へさくさく梅津は腕をさく梅津勢源さくさくさ  
 せおさくさく本刀勢源さくさくさくさくさくさく  
 ねてさくさく梅津さくさくさくさくさくさくさく

勢源と突んとしつと勢源本刀を振舞て打倒  
 と時と檢使をふるよ入て是と扱ひ梅津と成る  
 完へ入て喜生しと夫原の強宥よりと勢源の漢沙  
 ちりり西の成成音系人勢源の本刀小梅津の  
 折本刀を美新の山流より入仕合乃換子番細よ  
 プ河く世の美新甚美美美と未代の物流よとと  
 より本本刀を直直して梅原万連小袖一重と勢源  
 よ送る勢源Pよりけ申原流ハワウの侍員禁  
 制オと世を國オの命オとつとつとつとつとつと  
 ハ御慶美とオとつとつとつとつとつとつとつと

網と侵る森こり布れた終は交納せと美新甚  
 勢源の志と感一対面せつとつとつとつとつと  
 けとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
 り才子たつとつとつとつとつとつとつとつと  
 とととととととととととととととととととと  
 取柄者と若より勢源よ直して富田流乃小太刀の用よとととと  
 二のころ云々の梅付無て日知りの仕合とつとつとつとつとつと  
 勢源の事とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
 一のころ云々の梅付無て日知りの仕合とつとつとつとつとつと  
 才子を多くたつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
 身り刀物の事よ直して強勢とつとつとつとつとつとつとつとつと  
 たり勢源の才子を多くたつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
 へ勝負とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと  
 うらつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

千城小僧巻五

三十四